

Title	史料紹介 岩瀬文庫蔵「南颿日録」(3)「現糖調進之儀」: 解題および翻刻
Author(s)	小野, まさ子; 漢那, 敬子; 早瀬, 千明
Citation	沖繩史料編集紀要 = BULLETIN OF THE HISTORIOGRAPHICAL INSTITUTE(43): (1)-(24)
Issue Date	2020-03-19
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/24884
Rights	

〈史料紹介〉

岩瀬文庫蔵「南颿日録」(3) 「現糖調進之儀」
— 解題および翻刻 —

小野まさ子・漢那 敬子・早瀬 千明

岩瀬文庫「南颿日録」は、次の四冊からなる。

①「遊万里生手録 明治六年癸酉」／②「応答課目」

③「現糖調進之儀」／④「虬陽雜録 人造 組織物染物之類」

本号では前号に引き続き三冊目にあたる③「現糖調進之儀」を翻刻した。

前号でも述べたように、②「応答課目」③「現糖調進之儀」は本来一冊の史料で、「応答課目」冒頭には②③の標題一覧があるが(一)〜卅五まで)、本史料にはそのうち「十二」以降「卅五」の三月七日付け文書が収められている。

本史料は大きく次のように分類できる。①貢糖収納業務「十二」「十八」「三十」「卅一」「卅四」、②改暦知らせ「十五」「十六」、③琉球藩雜記(以下「藩雜記」として成立する調査の雛形および質問応答「十三」「十四」「十七」「十九」「二十」「二十一」「二十二」「二十三」「廿七」「廿八」「廿九」「卅二」、④条約書の検閲「二十五」、⑤中山世鑑、中山世譜、球陽の借用および筆写依頼「二十四」「二十六」の五つである。その他、戸籍に関する「二十」「二十三」、郵便開業「卅三」、最後に番号なしの二文書がある。

①に関しては、『沖縄史料編集紀要』第四二号に掲載した「応

答課目」の「十一」(一月八日付け)で、貢糖分を琉球藩の東京借財返済用に当てるために代銀納させてほしいという王府よりの要請を断つたのを受け、本史料の「十二」で、再度王府より、酉年(今年)だけは現砂糖での上納をするので、翌戌年からは琉球の支配に任せてくれるようお願いした文書がある。その後「十八」では、作業が予定通りいっていない状況が記される。担当の山崎中属と小林権大属より王府に対して、規定時間の半分で仕事をやめたり、多くの休日の申請があるなどして、作業開始の二三日から二五日までの納高総数が千挺程しかない、しかも旧正月になれば作業の遅れがひどくなることが予想されるため、積船の都合に間に合わない懸念がある、旧正月明けからは一日に六〜七百挺ずつ納めるように諸間切村々へ至急布達せよ、という達しを出している。これに対し王府は、昨年の大風で砂糖キビに被害が出て成熟が遅く、製糖を見合わせている間切があるからだと弁明の返書を出す。一応、達しの効果があったようで、数量は七分通り揃うが、「卅一」「卅四」では今帰仁と本部の両間切の砂糖未納という問題が起きている。遅延の理由として、自然災害や、今帰仁・本部の両間切が首里から遠隔地というだけでなく、王府によるサボ

タージュという抵抗を反映した可能性も考える必要がある。

②新暦改正については、同第四一号「南颯日録」(1)でも扱ったが、政府よりの正式通達ではなく、大蔵省租税寮の官吏である根本茂樹よりの通達である。「十六」は、五節句礼式の変化に関する王府の質問に応じたもので、根本は、明治政府も国家の大体に関しないものについては未定ゆえ、とりあえずは、これまでの風俗を勘案し、琉球で判断せよと応答するほかなかった。

今回の内容で最も重要な部分が、③の部分である。「琉球藩雜記」は、『沖縄大百科事典』下巻に仲地哲夫氏が記しているように、一八七三年(明治六)、大蔵省がまとめた琉球藩に関する全五巻よりなる調査記録であり、近代の沖縄歴史研究の端緒となった調査記録類の一つである。「藩雜記」は、内閣文庫蔵の史料が『沖縄縣史 第14巻資料編4 雜纂1』(琉球政府 一九六五年)に収録されている。構成は、第一巻 人口・戸籍、第二巻 段高、租税、物産、第三巻 家禄、官録、第四巻 法条、褒美条例、約条、第五巻 雑事、学校医院、社寺である。本史料「十三」(二月十日)には、地方での調査について王府へ協力を求めた際、言語不通等の理由で拒まれた記事があり、調査の前途多難を暗示する始まりとなった。根本らが実施したこれらの調査は、「十四」の村高税額一村限帳雜形、「十九」の「物産表雜形」「歳入歳出表雜形」「予備元払雜形」、「廿九」の「高取米調一村限雜形」などを提示しつ

つ、王府よりの質問等に対応していくという形で進められる。中でも、「十九」の二号は「藩雜記」の構成の基と考えられ、項目および雜形は必ずしも「藩雜記」に対応しているわけではないが、五巻の各部分に含まれている。これらは全て王府側に調査の方法や内容を指示したもので、当初から明治政府による直接の調査ではなく、王府よりの調査提出方式をもにしたものであったことがわかる。④と⑤は、それぞれが明治政府と琉球国(この時点では藩)との対外関係を考えるときには重要な問題を孕んでいるが、ここでは③の「藩雜記」として編集される調査に関するものとして扱うことにする。

最後の二文書は番号がないが、三月七日の記事は、十三日の出港(帰京)を控えて、藩王への暇乞いのために登城した日である。そこでは、滞在中の業務協力の礼を述べている。

終わりに、本史料では、貢糖調進も調査も、根本茂樹が主導して、山崎と小林が、根本の指示を受けて実務をおこなっているようにみえる。しかし、「藩雜記」という公文書には根本の名は出てこない。その謎を含め、詳細な分析をすることにより、「藩雜記」の疑問を解く鍵の一つとなる史料である。

最後に、本史料の翻刻掲載についてご快諾いただいた西尾市岩瀬文庫に感謝申し上げます。

〔凡例〕

文書の翻刻に際しては、以下の点に留意した。

I 基本的に漢字は新漢字を使用し、合字など特殊な場合のみ、そのまま使用した。また、助字にあたる部分は、他の文字より小さくした。

特殊な文字として、以下の例をあげておく。方（より）。なお合字のトモはトとした。

II 判読できない文字は□で示し、類推のできるものは行間に（―カ）で示した。また、翻刻者の責任で読点をつけた。

III 翻刻の様式は、行数・字数ともに、本紀要の字数にあわせて加工してあるが、原文の消しの部分は

〔例〕 あいぢ

のように棒線（見え消し）で示した。

IV 筆者の書き癖（例…時↓字、繰↓操、他↓侘など）などはそのままとし、訂正しない。

VI 本文で欄外に記されている標題の番号はカギカッコ「」を付し、太字で示した。

〔十二〕

現糖調進之儀、本書之通受書指出候間、将来之儀ハ帰省評議ヲ遂ケ、追而何分之御達可有之旨、鎖ノ側与那原親雲上へ申談候事

出物御米之内、直成替ヲ以上納仕候砂糖之儀、東京借用金返済之方へ指向申度、先達而代銀上納之方奉願候処、大蔵大輔之御下命ニ因而大阪出張之租税寮へ回漕運為之順次御決定被成候付、癸酉年之分ニ限り代銀ヲ以上納之都合ハ追モ御行届難被成候間、無異儀早々上納仕候様御達之趣委曲承知仕候、右通分ケ而被仰渡候ニ付向々へモ申渡、酉年丈ケハ急度現砂糖ヲ以上納仕可申候間、戌年ヨリハ当地支配之方被仰付度奉願候、此旨御受旁申上候、已上

壬申十二月

浦添親方

川平親方

七号

〔十三〕

書面之通相達候処、藩庁役場へ罷越候而モ言語普通ノ場合モ有之、旁御用之節ハ三司官及鎖之側之内何ケ度ニ而モ召出シ呉候様、第一月十二日与那原親雲上罷越申立候間、可応聞遂候事

今般拙者并一同之者共、御藩地へ出張候ニ付而ハ、凡民治ニ関干スル総而之条件ハ小大トナク追々可及御推問候得共、其事柄ニ寄り書面往答之外面晤ニ不申合候而ハ其情誼暢達難致筋モ間々可有之間、右等之節々御藩庁へハ勿論其筋役場へ拙者始一同之者罷出候間、一切無腹臆御高議有之度、且又御管下全部之広狭里程ヲ始、

物品之製作地味之善悪耕耘及壤養之方法等、其実況ニ臨ミ点検モ致シ度、因而在留中御用問見斗御管下巡回候間、此旨心得之為メ諸間切役場へ序ヲ以御達置有之度、且遠隔之場所ニ至リ自然馬駕籠等相雇又ハ宿泊等いたし度節ハ、其間切役場へ申出次第無指支取斗、尤賄向等之儀ハ従前之例規ニ不拘、全ク所有合便輕にまかせ務タリトモ、民間之勞費不相成様兼而ノ御通し置有之居度候、此段御達申入候也

癸酉一月十日

三司官宛

根本茂樹

八号

〔十四〕

貢租税法ハ治民之要領理財會計之本レ基にして、一国之隆替、民間之盛衰ニ関切する、今更言を俟ざる儀ニ候処、御藩属轄地方之儀ハ、遠ク慶長以往之檢地たるを以租庸調之方法或ハ今日之實際ニ於て自然民レ農之甘苦平準ニ出さる儀無之共雖申、然りといへ共其改正宜しきを得るハ古今一大難事にして、漸々歳月を経るに非されハ決而不叶次第ニ候得共、時運之變遷に承ひ又改めざるを得されハ、人情世態を御参酌之上、漸ヲ以夫々御釐正之御見込ミ可有之、因而拙者共ハ先当地方并先島々に至る迄、因習之賦税法及ヒ御藩收納之惣類等預シメ調査之上、大藏大輔へ追而相達候条、即右取調方凡例并に条書共別冊ノ通指進候間、右書式ニ照ラシ詳

細取調可被指出、尤書式に倣ひ難書分株或ハ高掛リ賦米錢等ニ至りてハ、各種之名唱一樣ならさる(実説)第も可有之間、調方に臨ミ巨細之案件ハ其筋主任之役々より直ニ拙者共へ問合候様御達置可被成、尚順次ヲ以追々可及御尋問候得共、先是向此条御達申入候也

癸酉一月十日

三司官宛

根本茂樹

同

本書相達候処、鎖ノ側出張難納得之間合候間丁寧及収申開候事

一 檢地年曆

一 石盛區別取扱方

一 反別一反歩之坪数并取扱方

一 年貢諸役取立方手續納期限

一 従来調進之出物米八千六百石余ノ原内

一 村吏役給等之有無并各村之定員

一 樹大小ノ區別并入目

一 米麦大豆等之俵入

一 檢見一切之手続

一 農具一卜通之數并其名目一品限りノ概略図

但、畑培養肥物之類

一 米麦大小豆雜穀之類蒔付旬季并取収之季節

但、稻々種下し之節共

一 農間男女ノ職之次第

一 從來取扱来候租税ニ関スル一切顛末之方法
右之通ケ条限詳細取調書面ヲ以可申立候、尚相洩候儀ハ追而御達
被申入候也

癸酉第一月

根本茂樹

三司官宛

村高税額一村限帳雛形

一間切毎ニ取束合帳ニ致シ候共、又ハ惣体合帳ニ致シ候
共便誼次第調査ノ事

検見取

永定免或ハ

何ヨリ何迄何ケ年定免

琉球国首里之内

一 反別何程

何村

此高何程

内訳

田反別何程

此高何程

此貢米何程

免

但、石代納或ハ砂糖納等有之村々ハ其収免内訳ニ可認事

畑反別何程

此高何程

此貢米何程

免

但、前同断

年々之高入新田成口ニモ相成居候分ハ

左ノ通一ト口ツ、ニ廉テ訳可認候事

一 反別何程

年号

何高入新田

此高何程

田畑両様ニ無之分ハ内訳ヲ省キ田反別何程、畑反別何程ト相
認、直ニ高ノ脇へ貢米ヲ可認事

内訳

田反別何程

此高何程

此貢米何程

免

但、前二准

畑反別何程

此高何程

此貢米何程

免

但、前同断

貢合

米 麦 砂糖 錢

完納物

一 米或ハ錢何程

何々年貢

一 米何程

何々役米

一 米錢何程

何々運上

右類之外年藩用ニ充炭薪或ハ秣大小豆等ノ類ニ至ル迄無洩、前
之振合ニ其品限取立候員数詳細ニ可認、尤年々増減有之分ハ
其品名ノ肩書二年々不同ト可認事

但、年貢ニ反布等ヲ為納候類モ本文同様可認事

一 大繩反別何程

此貢 米 何程

是ハ追々高受可致場所等地味馴不申全ク之貢難指定、其年々之作方ニ寄検見之上貢類ヲ極ル等之場所ヲ云之

何ヨリ何迄何ヶ年利子

一 錢銀 何程

何運上

一 錢銀 何程

同斷 何々役

一 錢銀 何程

同斷 何々冥加

一 錢銀 何程

右ハ年利子ヲ極メ役米錢或ハ運上冥加等取立来候類、右振合ニ准シ無洩可認ノ事

掛米何程

一 米何程

口米

但、本石何程ニ付米何程ツ、

掛錢何程

一 錢何程

口錢

但、何程ニ付錢何程ツ、

右二条、從來取立来不申候ハ、認ルニ不及

納合

米 砂糖 錢

此外納品之惣類ヲ可認之事

外

字何々

一 官林反別何程

但、何之木立或ハ雜木口 何ヶ所

但、反別不分明之分ハ字区認官林反別不知ト認ムヘシ

九号

本書相達已来新曆ノ月日ヲ相認口諭ス

「十五」

先般曆法御改正被仰出候ニ付而ハ不遠御藩へ御達可相成筈ニ候得共、海路不便故自然報告相後レ可申卜存候間、先以御心得之為別冊写相添、拙者より此条及御通達候也

癸酉第一月十六日

根本茂樹

川平親方殿

浦添親方殿

十号

一月十六日耳目官へ達

「十六」

五節句礼式之儀ニ付御問合之趣承知、右ハ拙者東京出發之頃迄ハ何れも祝日にして、官職身分之等級ニ応シ各官省府県之長官へ夫々当日之礼式申出候得共、先ニ先般旧曆ヲ慶シ、更ニ太陽曆ニ被改候上ハ、随而右等祝日之儀式御釐正も可有之与遙察致し候付而ハ、即今之模様駈与御答ハ難申入候得共、概して論し候得者、彼五節祝日之如きハ様唐之模倣ニして、敢而国家之大体ニ関すへき程之事々も有之間敷間、是等之儀ハ追而一般之成規御達申候迄暫く因襲之風俗ヲ御参酌なされ、其祝日ニ臨ミ下民之出遊親戚之応答等、先以御藩直宜之御措置ニ而可然相考候間、此旨御挨拶旁申入候也

癸酉一月十六日

三司官宛

根本茂樹

〔十七〕
番外

是迄当国より年々渡唐之船々へ、従前商人共之手を不経互二旧生座方より渡来候物件有之趣、伝承致し候二付而ハ、右凡積品数代働并彼地於而売却直段等、概略之処見合度儀候間、前四五年分程乍御手数御調越有之度、且彼地より旧御藩用之品々右船便を以御取入相成候分モ候ハ、是又同様御調越有之度、此段及御懸合候也

癸酉一月十七日

豎山郷之丞殿

根本茂樹

追而麿藩之後モ本文之御通取置相成居候哉、承知いたし度、此段も申渡候也

当国渡唐船ヨリ旧御藩用ニ御取入相成候葉種其外品書、此程及御懸合御答回之分見合相済節別冊四通返却いたし候条、御落手有之度、此段申進候也

癸酉一月二十六日

豎山郷之丞殿

根本茂樹

十一号

〔十八〕

去ル二十三日已来、貢糖請取渡相始メ候二付、拙者始附属之者共日々出張、斤量改方等立会候処、初日已後今日迄凡千挺程之納高二而、前以故標候時間半途にして止メ、或ハ休日等申出收入方抄故す、此分にてハ全数急速納済之目途モ不立、兼而御達申入候通り竜応丸繫泊之都合モ如何ト心配いたし候、乍去最早旧暦之月迫定例之休日ニモ相懸リ候趣、付而ハ来正月四日開場より必日ニ六七百挺ツ、納方相成候様、諸間切村々へ至急御布達可有之候、此段前以御達申入候也

癸酉一月二十五日

山崎租税中属

小林租税権大属

具志川親方殿

野村親雲上殿

右返書

第拾号之御書面委曲承知仕候、当年砂糖之儀、去九月之大風ニ获相痛成熟薄、焼方暫見合置候間切モ有之候得共、最早時節ニモ相成候二付急度焼出方指急、御達通上納致し候様諸間切へ堅布達致し置申候、此段御返答及ヒ候、已上

癸酉一月二十七日

具志川親方殿

前兩名宛

十二号

二十九

御藩管内ニ産出する諸物品并歳入歳出総計調表、或其他民治一切ニ関干スル案件之条類、別紙一号より三号まで凡例を以御達申入候間、夫々取調御呈出可被成、尤書式上而已ニ而不了解之廉々ハ、其筋主任之役々々直ニ演説可致条、其段モ御通達有之度候也

西第一月三十一日

根本茂樹

三司官宛

追而物産表式品名之内、当地ニ産出無之品、又ハ書式ニ無之共出産之物品モ有之候ハ、適宜加除記載可有之、其余御管下ニ出産無之、従前鹿児島其他より相回り日用相弁し候品類モ凡歳之入高数、概算調査之上物産表同様之式ニ基き、品名及ヒ員数代金高共別紙ニ記載可被指出候事
一、此程被指出候戸籍調方之儀ハ御付紙を以及御達、当戸籍編成之布達写候朱書ヲ添而進候間、両様之主意参考之上御取調可有之候也

物産表雛形

属島ノ分一島限此振合ニ倣取調可申事

一号

琉球国

米何百何拾何万何千何百何拾石

但、現石

麦

内 米何程
米何程
米何程

貢納
府中諸費并藩王歳費藩臣家禄及ヒ官禄給扶持等
人民自用消費
他国輸出

雜穀

内 前同断

大豆

小豆

粟

稗 右之外種類限可書載候事

菜蔬之類

内 品別前二同シ

但、人民自用ニ消費致し候分ハ不及書出、地味適當之物品及ヒ他国へ輸出之分大数可書載以下之レニ准ス

家畜

之類

野獸海魚鱗介

牛馬羊豕之類ヲ始其種別ヲ可認

菓実類

各其種類ヲ分可認

桑 茶 楮 漆 櫨 麻

但、麻・麻苧ニ類セシ織物、陶物、譬ハ蕉糸、椽皮之類

藍草

但、樹葉木皮等一切染草ニ可用モノ前同前

紅花

金銀銅鉄類器
珠玉珍之類

木綿

皮革之製法及ヒ其数器類之可作モノ

烟草

藺蔴蒲菰敷物類

材木

石器 漆器 竹器 陶器 木具

藥品

但、家具調度膳碗等之類各種ヲ可認分

繭

出来高并養方之式ヲモ可認

紙

蠟及蠟燭

海藻類

各其種類ヲ可認分

筆 墨
羽毛 之類

織物

細上布何反 下布何反 紬縞白何反 木綿 紺地何反
蕉布上何反 中何反 下何反 桐板 何反ツ、
右之通各種類ヲ分チ其数ヲ認ムヘシ、尤上布下布等何所ヨリ産
出セ何々ヲ以製スル苧糸ヲ以織レル其製方式ヲモ詳細ニ可認

朱
薪炭

右之通各種類ヲ分チ其数ヲ認ムヘシ、尤上布下布等何所ヨリ産
出セ何々ヲ以製スル苧糸ヲ以織レル其製方式ヲモ詳細ニ可認

右各用ニ不拘品ニテモ異草、奇艸、染草之類共其土地出產之物
品無遺漏取調可申事

蚕種紙

其数并製造式ヲ可認

鈹礦各質之石類結称等シク品類各様ナルハ略表ヲ製シ、巨細ヲ
分別シテ呈出可申事

生糸

同

右之通当管内一ケ年出產高大積取調書面之通候也

醬油

米粟唐芋等ヲ以製スル種類悉ク可認分

干支

琉球藩

味噌

長官姓名

油

月

塩

第一

砂糖

魚油及種類ヲ一々可認分

砂糖

出来高并製法式及甘蔗培養之方法ヲモ可認

歳入歳出表雛形

二号

歲入

正租

米何程

是ハ高掛諸繰米等ヲ除キ、全ク田畑ヨリ其年収入之惣高ヲ可記、尤石代納、或ハ砂糖納之分ハ其趣内訳ニ記スヘシ

雜稅

錢米何程

是者小物成并諸運上冥加之類收入之惣高ヲ可記

諸掛物

錢米何程

是者口米ヲ始総而高掛賦米之類、前同断

雜入

錢何程

是ハ官林損竹木其他品払代及ヒ過科錢等之類、前同断

返納

錢米何程

是ハ藩物成之内、村々へ夫食貸渡之類返納之分、前同断

置居

錢米何程

是ハ前年物成之内ヨリ仕官歳俸并他諸渡方之引当ニ米錢ヲ備置候内遣払之残之分モ可記

惣計

錢米何程

是ハ前ニ出セル各計之分合數ヲ記ス

歲出

藩庁諸費

錢米何程

是者藩庁費用年分遣払惣高ヲ可記、以下同断

藩王歳費

錢米何程

藩臣家祿

錢米何程

官員歳俸

錢米何程

扶持給分

錢米何程

是ハ救助下ケ切、或ハ官林守及ヒ諸給分牢舍人扶持米等之分一年之消費高ヲ記スヘシ

雜出

錢米何程

是ハ堤防橋梁各地一切官費ヲ以營繕之用費高ヲ記スヘシ

貸渡
米 何程

是ハ藩物成之内ヨリ村々へ夫食其外救助貸渡等之高ヲ記ス
へシ

置
米 何程

是ハ諸渡物引当米錢之内渡濟翌年へ可相回分ヲ記スへシ

惣計
米 何程

是ハ前ニ記セル各計ノ合数ヲ記スへシ

歳出入指引

米 何程
残

第二

予備元払雛形

予備元

米 何程
下ケ札ニテ、本文ノ類人民限貯蓄之分有之候ハ、其惣類取調別紙ヲ以可指出候事

是ハ凶荒其他非常災害之用意トシテ備有之分惣高ヲ可記

返納
米 何程

是者夫米其外救助品貸渡返納之分ヲ可記

合 米

予備払

貸渡 米 何程

是者夫食其外救助品等ニ当時貸与有之高ヲ可記

減失

米 何程

是者困置候錢穀焼失或ハ穀物類斗^付立減石之分ヲ可記

合 米 何程

指引

米 何程

是ハ前ニ記セル元払之合計ヲ指引、残困蔵或ハ庁中ノ有高
ヲ可記

目

三号

一、本琉球国ヲ始属轄ノ島々ニ至ル迄幅員周圍之調

是ハ琉球藩属島トモ概略其地形ヲ図ニ製シ、方向及ヒ度数ヲ
記シ、当国那覇ヨリ各支属島へノ里数ヲ誌スへシ

一、藩王ノ歴代及ヒ衣冠正朔之事

是ハ舜天王以来ノ位記姓名歴代即位讓位ノ年月ヲ始、衣冠ノ
来典章ヲ詳ニ記スヘシ

一、城郭官舎市街村落之景況

是ハ城郭ノ地理方向ヲ始、外郭周圍ノ間数、城別ノ員及ヒ名称、
官舎ハ各局名且所在ノ場所、市街村落ノ景況ハ町地田舎ノ境
界并設地名又ハ市場等、総而村里市町ニ関スルコトヲ記スヘ
シ

一、全部制置ノ事

是ハ府省間切各事務局ノ法度ヲ始、士民出身之次第、衣服ノ
制限且平民ヨリ村吏町吏ニ選用ノ手續等一切、市在ノ法則ニ
関スル件々ヲ記ス

但、孝子義僕ノ賞典、天災ノ節窮民ノ救助法、火盜ノ取締
向等モ此部ニ記入スヘシ

一、戸口

是ハ戸数人員ヲ始、族類共其總計別紙一号凡例ニ倣ヒ取調可
指出、尤爾後戸籍編制之儀ハ別紙達書ノ主旨ニ基キ則第一号
ヨリ三号迄ノ表式ニ模準シ、調査次第毎年二月ヨリ三月迄ニ
東京在番ノ官員ヨリ大蔵省戸籍寮へ可指出事
但、委曲ハ別紙付紙之通可相心得事

一、本琉球ヲ始属島共湊津

是ハ那覇運天ヲ始、先島々トモ湊津ノ場所ハ各其名ハ勿論、
凡幅員方向浅深潮ノ干満等挽測ノ量計ヲ記ス

一、河流塘橋

是ハ河流ハ其水原流末、何所ヨリ何所ニ流レ其河々之広狭凡
平均ノ間数ヲ誌シ、架橋ハ何所ヨリ何所へ渡ル其橋名製造之

式、堤塘ハ何所ヨリ何所迄凡何間、高サノ挽積、何川或ハ何湖、
出水ノ要害タルコトヲ誌スヘシ

一、舟車之式

是ハ舟車ノ数頂ハ勿論、斤量積石大小各種ノ称呼并其形模ヲ
図シ、船ハ其木品及ヒ帆ニ用ユヘキ品名、且進貢船ノ如キハ
新規製造ノ凡積費用高、且官船商船ノ員数トモ記スヘシ

一、兵備兵器之形様

是ハ銃鎗弓矢其他兵器ニ関スル類ハ古今ヲ論セズ、其形様員
数トモ記スヘシ、尤品名ノミニテ分リ難キ器械ハ予メ略図ヲ
添、其利用トモ誌スヘシ、且非常兵役等之名義ヲ以積立米金
ノ仕法等モ有之ハ其次第ヲモ記スヘシ

一、学校医院

是ハ各校ノ地名并大中小学ノ数、学則及ヒ学科、且公学ハ教
官姓名給禄校費ノ出方、生徒人員一歳学獎金高并熟則、私学
ハ学科及ヒ教諭身分姓名生徒人員謝儀ノ方法、更ニ建学開校
スルニ臨ンテ習学免許ノ有無等ヲ記ス、医院モ同断、漢蘭内
外ノ科医官姓名生徒アラハ人員数、学資金其院内病院施術法
ノ設アラハ薬料納方、窮民患者ノ救養方法等ヲモ記スヘシ

一、神社仏寺

是ハ神社ノ地名、境内ノ広狭、旧記原因祭典ノ儀式、祇官ノ
位格、仏寺モ同断、教法、宗門、僧尼ノ位階等ヲ記ス、但、
社寺トモ領地又ハ除地寄附地ノ有無ヲ記ス

一、度

是ハ曲尺鯨尺トモ其工用ニヨツテ分別セル訳ヲ記スベシ、尺
度鯨尺一尺ハ曲尺一尺何寸ニ当ル、反布一反一匹ハ鯨尺何尺

二当ル、市上ニ唱フル一尋ハ鯨尺何尺ニ当ルヤ、距離一間ハ曲尺何尺、一町ハ何間、一里ハ何町量地ノ一歩ハ何間平方、一畝ハ何歩、一反ハ何畝、一町ハ何反、立積一坪ハ何間立方等ノ洋算ヲ記スヘシ

一、量

是ハ現今管内一般公ニ用ユル枡ノ種類ヲ記シ、何升枡ハ徑何寸深何寸、何斗枡モ同寸法ヲ記シ、則十斗ヲ以テ一石ニ当ル大小ノ数々ノ割合ヨリ出ルヤ否ヲ記スヘシ

一、衡

斤目ハ各種類ニヨツテ差異アレハ琉球国内通常ノ一斤ハ何目、何品ハ何目ヲ以テ一斤トスルノ品名ヲ記スヘシ

但、權衡一貫目ハ千匁、一匁ハ十分ノ割合ヤ否ヲ記スヘシ
右枡并量秤ノ類ハ当管内ニテ製造シ、官ノ検印ヲ得ルヤ、又ハ従前ヨリ他方製作ノ品ヲ以テ弁スルヤ否ヤヲ記スヘシ

右之通ケ条限現今施行ノ処詳述ハ取調書面ヲ以可被申出候也

癸酉第一月

鹿兒島県旧在番奉行ヨリ戸籍調之儀相達置候趣ニ而、琉球藩ヨリ断左条ノ件々伺出候ニ付、朱書之通附紙ヲ以相達候事 癸酉一月

覚

二十

一、戸籍法則書之内、戸籍編制ハ当申年正月三十日現在之人員ヲ根拠トシ、同二月一日ヨリ凡百日之間ハ右人員検査之日限ニ候得ハ、日限中之増減ハ翌年正月取調ニ因而可改ト相

心得、付而ハ去ル寅年迄ハ御改相濟候ニ付、翌卯年正月方去年十二月迄五ケ年分之生死出入取、未十二月三十日付ニテ可相調哉、又ハ寅年改ハ無構、当正月本ニシテ相改可申哉

第一条ハ別紙戸籍編制達書并附札ノ主旨ニ基キ、旧曆西正月現在之人員ヲ本トシ可致調査、尤寅年改濟之後生死増減取調有之分ヲ現今別紙一号表式ニ照準シ早々取調、拙者共へ可被指出候事

一、右同之内、寄留人之事被記間敷也、当地之儀大国トハ相変リ、修行等之為永々他郷へ寄留仕候者無之、困窮候ニ付一旦他所へ引越候儀ハ有之候得共、段々移替等致し候也、右体之者改帳本ニ難召加、是迄寄留付無之、相改何ソ不束之儀モ無之事ニ候也、右体之者此節ヨリ戸籍へ寄留付仕候而ハ、毎度変易致し、却而混雜之基ニモ可相成候間、寄留人記方ハ相濟申間敷哉

第二条、寄留人之儀ハ他管轄之者、修行又ハ商用ノ為元管轄序ヨリ送籍モ無之、一時当管内ニ在留止宿之者ヲ寄留ト相唱候儀ニ而、当地之者他国他郷へ出張候共、全戸送籍不致分ハ即其出張地方之寄留人ト相成候也、当戸籍へハ其訳相記置可申事ニ候、尤管轄内地進退移転之儀ハ、其時々送籍ヲ以人別加除判然タレハ、寄留之名称ニハ決而関干無之候条、其心得ヲ以寄留表取調可申事

一、右同之内、流刑・徒刑等ハ是迄通他所出地所入与相記シ候而ハ相済申間敷哉

第三条、流刑・徒刑等元帳調方ハ従前之通適宜タルヘク候得共、表式認方之儀ハ凡例之通相記可申、尤罰刑満期

ニ至帰郷等之節ハ更ニ本籍ニ帰シ、表中加除可有之候事

一、右同之内、戸籍表之用紙ハ厚紙ヲ用ヒ、戸籍之用紙ハ美

濃紙之寸法ヲ準リシ公用之野紙を用ゆヘシト相見候処、当

地前々ハ下紙詠下相認候得共、文化之度已来才覚不相調下

百田紙ニ相認来候間、其通ニ而ハ相済申間敷哉

第四条、用紙之儀ハ当地当今之紙品ニ而モ不苦候得共、

美濃寸法ヲ見合、可成堅牢持久之品相造、公用之野紙ヲ

製し相用可申事

一、鑑札之儀ハ法則書ニ相見候通、弥渡方無之筋ニ而可有之哉

一、是迄行路之者共ハ都而教人共ヘ候ハ、外ニ相記、惣頭方召

迎来候処、以来戸籍ニ可組入候哉

五、六兩条ハ申出之通タルヘキ事

一、戸籍之儀、前々ハ清書老通指登来候処、此節ハ法則書ニ

相見候通式通差登可申哉、且戸籍表職分表ハ老通差登セ可

申哉、尤戸籍清表通り差登候ハ、一通ハ御押印被帰候哉

第七条、戸籍表 共式通ヲ製シ、一部一通ハ藩庁ヘ備置、

一部一通ツ、指出シ候儀ト可相心得候事

一、戸籍為申方之儀、是迄年頭使者船便ヨリ指登セ来候処、

此節モ弥相通可仕候哉

第八条、届方期限ハ別紙ヘ相達候通可相心得候事

申八月七日付

琉球藩伺来書ノ通相達候事 癸酉一月

覚

一、鹿児島県庁御書付ニ琉球ハ第六六区ニ相定、小区之儀

ハ地形之便宜ニ応シ可相調、且法則書ニ凡区別ヲ定ムルハ

一府一郡を分チ、何区或ハ何十区トシ、其一区ヲ定ムルハ

四五丁又ハ七八丁ケ村ヲ組合スヘシ、尤急ニ区画ヲ定ミ難

キ処ハ、仮ニ便宜ニ從ヒ一村一町ニ而検査セシムルモ妨ナシ

ト有之、当地之儀首里^{ミヒラ}三平等ニ而一帳、那覇泊久米村各一帳

宛、諸間切諸島両先島を老間切一ヶ島宛各一帳ニ相認、左

候而首里那覇泊久米村ハ村所之与頭、諸間切諸島ハ各惣頭檢

者、両先島ハ所之在番頭ニ而相改奉行所ヘ指出シ候得ハ精々

取調、首里ハ改奉行、那覇ハ里主・御物城、泊ハ泊地頭・頭取、

久米村ハ両長吏、諸間切諸島ハ各惣地頭檢者、両先島ハ物

奉行奥書連印ヲ以清帳相認指登セ来事ニ而、区画之定ハ是迄

通之振合ニ而相済可申哉

第一条、区画定方之儀、今般琉球藩ヲ被置候上ハ当管内

ハ勿論、属轄島々迄更ニ地形之便宜ニ応シ区分可相定儀

ニ候得共、従前諸間切村々組合相立調査檢レ点之便ヲ為

シ候上ハ、先以仕来之通取扱不苦候条、追而其地形ト間切組合方トノ都合ヲ量リ区画之方法相設候而更ニ可届出候事

一、法則書之内、皇学支那学医術算術等段々職分被記置候処、当地之儀官員農工商雜業漁者まで取ベ、尤是迄之役名難取直儀共有之候間、是迄之振合ニ而相済可申哉

第二条、職分表之儀ハ総而表式ニ倣ヒ取調可申、尤是迄之役名取直シ候ニ不及、勤仕之者ハ官員之部ニ入取調可申事

但、表式之内当管内ニ無之職分ハ適宜相除可申事
申八月付

本書ノ布告未十二月中鹿児島県ヨリ相達有之候処、当管内之儀ハ従前之仕来モ有之、一時ニ難相改廉不少、因而朱書之通附札ヲ加候尚為心得相達候事

癸酉一月

戸籍編制之章

本書面戸籍編制之儀、当管内之分此際ニ限旧曆西正月三十

日現在之人員ヲ根拠トシ、取調已来布告之通可相心得候事

死者届方期限之章

書面届期限之儀ハ第七ヶ条ニ相達候通心得不苦候事

戸長副給料之章

当部内之儀ハ別紙ニ相達候通、先以従前之役場ニ而戸籍検査之儀ヲモ掌レハ、即今本文之ヶ条ニ関セスシテ可也、尤戸籍取締方之職掌ハ市町村戸長及副戸長之名義ヲ設給料并諸入費トモ民費ニ相立当然タレハ、追々改正之見込相立可申事

番号之章

番号之儀ハ現在ノ人員調査相済候上便宜之処置可有之事

送籍証之章

書面之事務取扱之儀モ先従前之役場ニ而引受本文之例規ニ準

シ処分可為致候事

囚獄及徒流人之章

別紙ニ相達候通可被心得事

總計表并届期限之章

書面戸籍表届期限之儀、当癸酉年分ハ旧曆西七月中届出、尔後ハ本文之通可届出相心得儀勿論ニ候得共、遠海離島之届様順逆之次第モ可有之条、翌年三月中ヲ限可届出候事

寄留者之章

書面取調方之儀モ先従前之役場ニ而取扱候上ハ、夫々本文之

式ニ倣ヒ所分法相立可申、尤(前字之)尤藩庁へ戸籍主任ノ官員ヲ置、

諸方ヨリ調出ス所之事務ヲ総括セシムヘシ

右之外戸籍職分寄表等ハ此状ヲ都加除致し当面命口授セしむ

本書之趣第十三号ニ相違候条款中ニ記載有之候得共、当調査之詳明ヲ理スル為、附録ト相心得可申旨、又鎖ノ側与那原親雲上ヘ付托ス

同

十三号ニ屬ス

一、王子家格式家禄増減之次第

一、藩臣大小之格式家禄増削之次第

附 按司家禄高姓名、総地頭・株親方・里之子親雲上禄高

人名、脇地頭・親方・里主親雲上及ヒ已下之士族禄高給扶

持人名共記載スヘシ、其余無禄之士族ハ載ルニ及ハス

一、撰政三司官始諸役場諸島之役員下等ニ至ル迄一体之類別順

次人名官禄給扶持等詳細ニ載スヘシ

一、仕官出身之条例

一、法条令条一切ノ制度

一、年中ノ祭典諸儀式之例規

右之条件、即今現実ニ施行之次第ケ条限詳細調査之上、書面ヲ

以可申立候、此段御達及ヒ候也

癸酉第一月

三司官宛

根本茂樹

十三号

「二十一」

過日被指出候当国諸郷定納高調方之儀、夫々巨細附ケ札ヲ以御達

可申筈ニ付而ハ田畑畝反其外之廉々見合セ不申候半而ハ二重之手
数相掛候故、右畝反御調之間ハ当方調方相止メ居候儀ニ付、可成
至急取調被指出候様、其筋専務之向々へ早々御通達有之度、此段
申進候也

癸酉第一月三十一日

兩名

与那原親雲上殿

十五号

「二十二」

撰政・三司官已下之役々ニ至ル迄、俸禄其外調振別紙雛形御達申
候条、右ニ倣ヒ御取調可有之、且家禄調帳之方ハ此程被指出候振
合ヲ以現今之処御取調、両様共早々可被指出、尤王子・按司ヲ始
其他之内、勤（勲）功に依而官ニ付当代家禄何石ヲ支給すといへ
共其子其孫に至リ何石ニ減シ、又其子孫ニ勤（勲）功ある時ハ何
石ニ増禄ス等之制限規則、其詳細手續別冊ニ取調、別条書類一同
指出有之度、此段御達申入候也

癸酉二月五日

三司官宛

根本茂樹

第二月六日与那原親雲上持参書面届方期限之儀、例年二月ト規則ニ掲載
有之候得共、遠海之訳ヲ以三月限ト相達候处、尚申立之事実無抛儀ニ付
当分申出之通聞置付紙朱書之通相達候事

覚

〔二十三〕

戸籍届上方期限之儀、当癸酉年分ハ旧曆酉七月中、尔後ハ三月中限可届出候旨御付札ニ相見ヘ候処、国中島々掛ケ而急にハ中々相整申間敷、就中両先島ハ遠海之処ニ而例年五六月頃当地ヘ相届キ可申事ニ而、旁以三月中届上候様ニハ所詮不相整候間、琉球ハ遠海相隔候訳合御取分を以、尔後共七月中届上ケ候様被仰付度事

癸酉正月

書面之趣事実不得止次第二付、追而海路航渡之便ヲ得候迄当分申出之通届方取計不苦候事

二月一日鎖之側ヘ相渡

十四号

〔二十四〕

中山世鑑 球陽記

右之両本一覽致し度、尤冊数多分ト相考候ニ付指向御写取ニハ不及候条、御收藏之分其儘御指出可被成、此段御達申入候也

癸酉二月二日

三司官宛

根本茂樹

十六号

〔二十五〕

先年来欧米西州之国々ト交誼取結ヒ候節之条約書、檢閲致し度候条、謄写之上早々御指出可被成、此段御達申入候也

癸酉二月五日

三司官宛

根本茂樹

追而結盟之国々ヨリ領事官又ハ領事ヲ代理セシ伝法教師等、当国ニ掩留致居候分其国名在留帰航之年月迄委曲取調、書面ヲ以御申出可被成候也

十七号

〔二十六〕

頃日中山世譜一覽致し候処、建国已来王統之變換、歴世之沿革、明了にして、其編修之規度実ニ感服ニ堪ヘツ候、因而全部ヲ書写し、之れを政府之内史局ヘ指出し度候処、拙者始一行之者夫々調査之案件多端にして掩留中逆モ謄録スヘキ余暇無之ニ付、藩庁ヨリ其筋之筆帖ヘ下命ありて連々全函を写取候様致し度、尤筆墨紙之經費ハ某より呈進可申候、よつて借覽之全部九冊返却、此段御依頼及ヒ候也

癸酉二月十一日

三司官宛

根本茂樹

二月十四日鎖之側へ相渡

十八号

「廿七」

同

一、田畑之取箇ハ何程ヲ官ニ収メ、何程民ノ所得ト定則相立居候哉、

一、村々之都合ニ寄り、米・麦・大豆等ヲ石代銀納ニ相願候節
ハ、諸間切々々ニ依リ相場立之季節并場所之區別有之候哉一、
塩浜年貢ハ一ヶ年何程ツ、取立来候哉

但、塩浜惣体ノ畝反并村名年分焼出高共取調可被指出候事

一、鳥獸魚胤、運上冥加取立之次第

一、百姓持山并山年貢等取立有無

一、当国内ハ勿論、所轄之島々ヨリ貢米其他之収品積来リ候船

二運賃渡方之手続及ヒ島方ノ納期限ハ琉球国内ト區別有無共

一、米雜穀之外、炭薪其他之品并役米等收納之次第

一、年々蔵方用并是迄鹿兒島へ御召御用ト唱、反布類ヲ米ニ換

為納候分、年々何程位有之、且上布・紬・木綿・蕉布共一定

或ハ一反ニ付米何程ツ、代米相渡為納来候哉

但、海峯其他之品ハ何程ニ付何程ニ換ル等之訳、本文反布

類同様取調候事

一、那覇其外市場運上取立有無

一、堤敷・道敷・溜池敷・溝用悪水路并郷中囤蔵敷等之地所、

従来手取扱摸

一、田畑ヨリ屋敷成并畑田成田畑成等之地所、従来之取扱摸

一、新田畑開発并荒所起返等之地所、従来ノ取扱摸

一、田畑損地等之節、引方申付候手續

一、貢米・貢糖等都而納場所迄ノ持込ハ、里数ニ不拘村方入費
に候哉、又ハ里数ニヨツテ官ヨリ何程力支給スル等之次第

一、王子已下諸官員及平士ニ至迄、首里其他諸方ニ散在住居之
邸、其分限ニヨリ坪数ノ制限并年貢地・無税地之訳且官員ノ
家作官費自弁之別有無共

但、諸間切番所敷地高内外有税有税之別并家作官費村費之

訳、且農民ノ内篤行・奇特等有之者へ居屋敷或ハ所持田畑

之内庸調ヲ指免候類ノ有無、及ヒ祝部・内侍等屋敷地ノ次

第

一、墓所敷地之儀ハ其身柄ニ依而広狭ノ制限有之候哉

但、右敷地高内外有税無税之訳合

外

一、堤防橋梁等ノ費用官給ノ民費其場所ニ依區別之有無

一、仕官ノ向俸禄并其他家禄等、渡方期限及ヒ手續共

一、入牢人共賄方其他ノ手續并無宿ハ官費、有宿ノ費用ハ

其所ヨリ弁スル等之區別有無共

一、首里那覇其他市在人民ノ屋住地者何様之取扱ニ相成居候

哉

右通ケ条限詳細取調可被指出、尤右条目之外從來地方ニ付而之取斗向ハ、瓊末之事柄ニ至ル迄一切無洩調加候様致し度此段御達申入候也

癸酉二月十四日

根本茂樹

川平親方殿

浦添親方殿

十九号

〔廿八〕

從來進貢船ヲ以隔年支那国帝へ調進セル定額之物件、并臨時相贈候品類ヲ始、彼地入京之節宴費之次第、正副使臣以下乗船之人員、從者、福建掩留中給与等之事接貢船渡唐之節、調貢セル品物之次第、及ヒ彼地ニ於而会积向之事

但、当地出帆并彼地滞在日限等之事

進貢、接貢之兩船隔年何艘ツ、仕出し候哉、且当地物産ヲ積入彼地ニ於而売却互市之手続、又彼地ヨリ菓種・織物ヲ始、其他積帰候物件之種類ハ勿論、彼我貿易売買之行情価格高低等之事

右書類委詳取調、書面ヲ以早々可被申出候、此段及御達候也

癸酉二月十四日

根本

三司官宛

〔廿九〕

高取米調一村限 雛形

首里或ハ何間切

一 反別何程

此高何程

何村

米 何程

粟 同

麥 同

此貢

大豆 同

小豆 同

菜種 同

黍 同

右振合に倣、本琉球ヲ始、島々之分共一村限取調、早々御指出

有之致候事

癸酉二月

書面之雛形二月十五日鎖之側へ相達候處、同十六日、左之下ケ札ヲ以申出候間、直ニ朱書之(附紙)之通附紙ヲ以同人へ相渡候事

琉球藩ヨリ申出下ケ札

御本文、藏方ヨリハ総而之定納物各間切指向取扱仕候事ニ而、一村限之取調ハ御免ニ而一間切限リ之取調被仰付候而ハ何様可有御座候哉

右附紙

書面一間切限調方取扱候共、一村之高及反別及ヒ貢納高之分別無之而ハ一ト間切之高反別モ計算難相成筈ニ付、夫々書類調査ノ上、雛形之通調書相整可被呈出候、尤指

向調方難行届候ハ、無抛事ニ付、先一ト間切之分難形ニ照準相調可被指出候事

二月十五日没

三十一

琉球藩貢米之内代納砂糖收納方之儀、於当地斤量立会之改メ、大阪租税寮へ回漕之一事ハ、当港碇泊之鹿兒島県下商浜崎太平次船龍応丸其他二艘へ積入候方便利可然ニ付、運賃之儀附属共為談合候処、百斤ニ付金一円之割ヲ以請負致シ度旨申出、因而夫々及算計候処、於内地諸物品運送賃等ニ引合候ハ、少シク高価ニ相当可申哉ニ候得共、右貢糖運賃之儀ハ、従前鹿兒島県ニ而取扱候節ヨリ略取極メ有之、一概ニ内地之割合ニハ難見合、殊ニハ遠海之離島、時々航海モ難相成不便之場所ニ付、於船方之諸失費モ不少趣ニ付、先ツ従前之運賃等取調、指引算当致し候処、左之通百斤ニ付一円十一銭余、其金額ニ而千六拾七円余之減方ニモ相当リ、且是迄之運賃渡し方等附属之者へ内搜為取調候処、別冊之通、拘船方ハ琉球藩ヨリ相納候運賃米現品其儘受取、右ヲ以商買貿易之方法モ相立、自ラ定員運賃之外ニ内実多少利益モ有之由、然ルニ此度之運賃ハ悉皆大版着船之上相渡候ニ付而ハ格別之減省ニモ有之、旁申出之運賃高強而不相当之儀ニモ無之ト相考候間、書面金一円ヲ以回漕之儀、為請負可申事

但、是迄ハ解并仲仕賃、着船之藏入其他之諸雜費等ハ本船賃漕之外ニ相立有之候得共、右ハ総而一式受負ニ申付候方荷物損害之憂モ無之候間、申立之通取極可申事

一、従前ハ樽数ヲ以運賃相立来候得共、入目不同ヲ以樽数ニ相掛候ハ不相当ニ付、百斤一円ト改メ取極候方可然事

癸酉第二月

貢糖運賃之調

一、貢米八千六百六拾九石貳斗貳升五合

内

米三千六百八拾石

砂糖代納

此貢糖

九拾七万三千三百三拾四斤

此樽凡八千三百八十挺

此運賃

金九千七百三拾三円三拾四銭

但、百斤ニ付一円之積

内

金七千八拾貳円二拾錢程

但、琉球那覇市上現今相場米一石ニ付琉目三百四拾眞文此金六円八拾錢

是者従前鹿兒島県へ貢糖相納候節、一々琉球ヨリ

鹿兒島迄之運賃トシテ貢米一石ニ付米三斗ツ、掛ケ

添相納候ニ付、三千六百八拾石分之運賃米千四百石

当酉米納季節ニ至リ貢米同様取納之筈ニ付、右石代

金及口夫々之通一時租税寮ニ於而繰替相渡候分

金貳千六百五拾壹円

是ハ租税寮ヨリ一時繰替相渡、追而貢糖払代ヨリ御出方可相成分

従前鹿兒島県於テ貢糖取扱候節、琉球ヨリ鹿兒島、夫方大阪迄
運賃之額

金七千八拾二円二十銭

是ハ琉球ヨリ鹿兒島迄ノ運賃米払代積

金百六拾七円六拾銭

是者前同断ノ重運賃トシテ八千三百八拾挺分、一挺ニ付二銭

ツ、相渡候分

金三千百四拾貳円五拾銭

是ハ鹿兒島ヨリ大阪迄之運賃樽数同断、一樽ニ付三拾七銭五

リツ、相渡候分

合金老万三百九拾二円三拾銭

外ニ

金百貳拾五円七拾銭

是ハ琉球於而貢糖本船へ積入候節、ハシケ舟賃并運人賃銭、

一樽ニ付琉目銭七百五拾又ツ、樽数前同断

金貳老百九拾三円三十銭

是ハ大阪川口ヨリ各卸并仲仕賃上荷舟賃水揚藏入諸雜費、一

樽ニ付三銭五リツ、樽数前同断

一四老百拾九円

惣合金老万八百拾老円三拾銭

但、老挺ニ付 一円貳拾九銭余ニ当ル
百斤ニ付 一円拾老銭余ニ当ル

内

金九千七百三拾三円三拾四銭

此度可取極運賃高

指引

金千七拾七円九拾六銭 減

右之通ニ有之候也

見合書類ハ照会録ニ編ヌ

二十号

「卅一」

当癸酉年分貢糖、諸間切ヨリ納方之儀ニ付、過日御懸合及ヒ
候処、夫々へ之御布達相届候故、追々抄取本日迄之納高猶金
額之七ト通りニモ至リ候趣、然ル処本部間切・今帰仁間切之
分遠隔之場合ニ有之候歟、未タ納方無之、其余諸間切之内残
納之分モ有之候処、右納糖今後連々着荷相成候様ニ而ハ扱穀少
多にして其時々開場斤量相改候訳ニモ相成兼、夫可為調人共
待合セ空敷時日ヲ費シ農業ノ妨ケ候而ハ外然ニ付、本部・今帰
仁之両間切ハ勿論、諸間切納残之分共、当三月中可成一時ニ
納方相成候様夫々之頭役々へ至急御通達有之候様致し度存候、
此段及御照会候也

癸酉二月十六日

兩名

具志川親方殿

右物奉行へ相達、二月十八日委曲致承之旨答書来ル

二十一号

行文中賦ノ文字ハ琉球鹿兒島等ノ方言ニシテ管或ハ積等ノ文意、土人解シ易キ為メ常ニ用ユル也、看者笑ナカレ

「卅二」

過日以來順次課目ヲ以及御達置候調査之条件、追々調整之運ヒニ至リ候哉、右一条決定次第拙者并一行之者一ト先帰省可致見込ニ候処、幸ヒ当港碇泊之龍応丸貢糖回漕ノ付第三月七八日之頃風様次第当港揚帆之趣ニ付、右へ便船帰行之賦ニ候間、諸調之件々ハ可成当月中ヲ限り相決候様御手繰有之度、付而ハ諸件御調出之上尚御推問ヲ不重候而ハ了難致件ニも可有之ニ付、総体調済之間ヲ不待、一条一事調査出来次第右調方主任之役々一同御指出可有之候、尤懸ケ隔候為自然往用向御改之時局達迫候而ハ不便ニ付、時宜次第兼而御達申入候通、当方ヨリ其御役場へ出張候而聊不畏候間、無御隔意御申聞有之度存候、因而調方年切之程合御問合申度、旁此段御達申入候也

癸酉二月十九日

根本茂樹

三司官宛

二十二号

「卅三」

客歳下着已来追々当地之景況ヲ閱するに、凡ソ道路橋塘之修整、田圃種芸之培養、人民稼職之勧誘に至る迄一々能其方法を申合せるは全く御藩政教之布治する所以にして於我輩も感^佩□ニ

堪へ候、然ル処、当国之儀ハ薩海之南を去る僅三百里之距離なるを、是迄遠洋弧島之名を下し往来舫旅之隔絶せる、畢竟航渡舟針之術□遠して毎歳偶一季楫帆に任せ其便誼を得るも、或ハ占風候汎之順逆により独覆没の杞憂を抱のミ、是可為海外之進歩に暗々局外の物情に疎ク、自然物価貨運輸の昂低を計算する又かたはれず、終に国産の名につて其実貨は他に備作せられ、其利潤ハ他に網羅せらるに至るへし、よろしく此災害を転して流通の便利を開かんとせハ速ニ大阪東京の両府を始、属島に至る迄当国ト商会結社の良法を設^{会社弁ニ委シ}て一因一島上下貧福力を協せ而て其物産之製造売買の運為を自在にし、以て人民之各業ヲ益□大に勧誘するを緊要の事にす、扱其端緒を開きつ第一航旅の便を得る而已ならず、早く信書の往収を自由にし、互ニ交誼相通シ四方の物情を知り物価の高低を察し、事々物々参商の隔地も容易に報知を得せし成る事、尤急務也、因而去ル明治二年より大蔵省中ニ駅通寮を置き、五畿八道を始、三府七十二件へ官員を指置、郵便の方法施行あり、然るに今哉全国は更に遠く海外欧米の外海に至る迄、簡易ニ信書早通の良法を布整頓せり、爾来客問之便利は勿論、国家其有益甚大なり故に当国之儀モ先ツ鹿兒島ヲ始大阪長崎の間に郵便の信路を設ケ、文書往収之便を開かん為、拙者共東京出發之後駅通頭より曲^レ委来帖之趣も有之儀ニ付、来着後頗りニ討議シ、略目途相立候得共、各方に於而ハ猶御良案も可有之

卜考候間、別冊郵便□図書二冊進呈せしめ候条、篤卜御熟覽之上何分之御見込承知いたし度、右は御同様之職に於て民間ノ便利を量る尤至要之事務なれば、各位宜之を採訳し速ニ實際施設之手暇を被申合候様致し度、此段又以申入置候也

癸酉二月十九日

三司官宛

追而郵便之方法別冊に委詳なり候へ共、施行實際之手続に至り難納案件も有之候ハ、概略之御見込相立候上有之、別而御面語ニ可有之也

二十三号

「卅四」

本部間切・今帰仁間切貢糖其他諸間切之内、同納残之分収納方之儀ニ付、過十六日御懸合及ヒ候処、速ニ御答之趣モ有之候間、可成一時上納相済候様手筈相備置候処、外間切納残之分ハ連々着荷凡百有余程モ有之由ニ付、納入有間敷為相待候モ不考合に付、右ハ今二十四日収納為相済申候、因而ハ本部・今帰仁兩間切之儀、於御藩モ堅御達可有之義ニハ候得共、遠隔殊ニ船路運漕之事ニ候得ハ、風様之順逆ニ寄り遅可及ハ毎摺次第二有之、然ル処、拙者共茂第三月初旬ニハ風順に任セト先帰京之賦ニ付、附属之者モ同様帰行之筈ニ而、彼是御用向多端にして連々相納候渡之斤量相改候儀、指支候間、右納残之高取調

候処、最早七万五千斤程之義ニ付、右ハ現今御藩蔵方へ日々相納候砂糖ヲ以、前書納残之分外間切より繰替為相納、貢糖全く皆納ニ至リ候ハ、一事兩然之義与相考候間、其段右役場之御達之上、可成来ル二十六七日中ヲ限り皆納取候様御取分有之度、此段再応及候間□候也

癸酉第二月二十四日

物奉行宛

兩名

二十四号

「卅五」

従前御藩於て鹿兒島或ハ所属之島々へ至急之要状有之節ハ飛船ニ御信書伝使通セしめ候趣ニ付、左ノ条件御問合申候

- 一、飛船之儀ハ海上季節等ニ不関航海相成候哉
 - 一、当地方鹿兒島迄風順之都合ニモ寄候得共、是迄大概日數幾日程にて着船候哉
 - 一、飛船ニ相用候船ハ官船ニ候哉、又ハ商船等之内ヲ以弁用次第二候哉
- 但、商船等相用候時ハ下往役何様ニ而借上ケ候哉
- 一、飛船々夫之儀ハ、平常米錢等宛行被備置候哉、又ハ臨時傭上リ候第二候哉
- 但、雇上リ候節ハ下往役何程之賃錢相渡候哉

一、右飛船々之儀ハ、航渡之事業功者ニ無之而ハ相成間敷、右様之者当所ニ何人程有之候哉
右之条件承知致し度候間、其筋御取調書面ヲ以早々御申出有之度候也

癸酉二月二十四日

兩名

鎖之側宛

三月七日書院奉行ニ渡

這回拙者并一行之者出張之事務件々多端之處、三司官已下諸役々之勉強ニより存外速ニ御用相濟候ニ付而ハ、一ト先帰京之^(旨奉ル)上実地調査之条件ハ勿論、掩留中御熟儀之次第ニ至る迄寸刻モ早く我長官へ委曲演說致し度、因而来ル十日前後乗船候汎之模様に従直に揚帆致シ度賦ニ付、本日面謁之上具に御暇乞申展度、只今推参仕候也

癸酉三月七日

々茂樹

同日同様

頃日正使伊江王子ヲ始、副使宜野湾親方已下随行一同航旅無恙帰着致し候段、嘸かし御満足ニ可有之、拙者共ニ於而モ大慶不過之候、右祝詞序ヲ以申進候也

癸酉三月七日

々